

1 「情報」を読む

データを解読し、解釈せよ

▶ データを意味づける

以下に続く章で扱われている題材は図・表から学問・理論まで、それぞれ情報の固まりだ。そこで、まず本章では、そもそも一般的に「情報を読む」とはどのようなことかについて考えてみることにする。

「情報を読む」を考えるにあたって重要な観点は二つある。

第一は、「読む」とは情報を解読することである、という観点である。

読むとは、その情報を構成している「ルール」を知る行為であるとする立場だ。そこでは解読が必要となる。情報とは、あるルールに基づいてデータが構成されたものであり、そのルールを推定していくことが解読という行為である。この観点から「情報を読む」ことが求められる。

第二は、「読む」とはデータを解釈することである、という観点である。

読むとは、「意味づけ」行為であるとする立場だ。情報とはデータを意味づけたものである。読むとは、そこに書かれている意味を読む、という受け身の行為ではなく、そこに書かれていることに意味を付与する、という能動的な行為だ。この観点から「情報を読む」ことが、これまた重要となる。

本章で強調するのは、情報を読むとは「データを意味づけること」、つまり解釈行為である、という点だ。解読と解釈の違い。データが意味づけられて情報となる点を理解してほしい。

1 解読と解釈

文面を読む、文意を読む

情報の読み方は二つある。一つは「解読」、もう一つは「解釈」。この二つはどう違うのだろうか。

解読とは、通常、「暗号の解読」といった表現で使われる。ある文章があるルールに基づいて別の形式に変換されており、それを謎解きのように読んでいく、といったことを思い浮かべるであろう。あるいは、「古文書を解読する」といった表現もある。これも、我々の知らない昔の言葉を読み解いていくこと、つまりある種のルールに沿って作成された文章内容そのものとそれを作った際のルール（文法）自体も調べていくわけだ。

このように、解読というのは、ある種のルールに沿ってデータが構成されており、そのルールに則って一つ一つのデータを調べていけば、全体を読むことが可能になるというものだ。これは「文面を読む」という行為だと言える。

一方、解釈とは、解読とは大分違うイメージだろう。「会議で常務が言ったことは、どう解釈すればよいのか」と言えば、その常務が言っている言葉の表面上の意味は分かるが、それをどのように受けとめればよいのか、ということだ。「この小説は多様な解釈が可能である」と言えば、これは同じ小説を読んでも、読む人によって様々な意味を受け取るだろう、ということだ。

解釈とは、解読のように文面を読むということではなく、「文意を読む」ということになる。つまり、ある対象に、自分なりの意味を見いだすことに他ならない（もちろん、ここでは日常表現として「意味を読む」としてある。しかし、後で述べるように実際は我々が主体的に「意味づけている」のである）。

これらについて、詳しく見ていこう。

2 ルールを見つける：情報の解読

ルールと解読

まず、例を使って、解読とはどういうことかを考えよう。

<質問1>

ここに「O T T F F ?」というアルファベットの記号列があるとしよう。ここで「？」にくるべきアルファベットは何か。

.....

答えは「S」である。

種明かしをすると、「O T T F F」は「One Two Three Four Five」のそれぞれの頭文字を並べたものだ。したがって、次にくるのは「Six」の頭文字「S」となる。「O T T F F」という記号列は、実はそんなルールに基づいて並べてあったのだ。こうして背後にある並べ方のルールが分かれば、誰もが「なるほど！」となり、意味不明だった文字列もにわかになんか意味を帯びてくる。

さらに、このルールに則していけば、「S」の次が「S E N T」と続くことは容易に推測できるだろう。

<質問2>

次に、「1 3 4 6 8 10 12」という数字の列は、何を意味しているかを考えてみよう。こちらは、首都圏に住むある年齢以上の方でないといふピンとこないかもしれない。

.....

答えは、ちょっと前までの、関東エリアにおけるテレビのチャンネル番号である。そう言われた瞬間に、何だか妙な並び方をしていた七つの数字の意味が分かり、すっきりとした気分になる（これは昔、ある東京の有名私立小学校で出された入試問題である）。

このように、ある情報を読むとき、背後に潜むルールが分かるとその情報の意味がたちどころに理解できるということがある。逆を言えば、ある種のデータの集合は、ルールが分からなければ単なる数字や文字の羅列でしかないので、全く

理解できなかつたり、間違った理解をしてしまうことがある、ということだ。この点は、情報の読み方として重要なポイントである。

では、これらの例のようにデータだけを与えられるが、ルールは与えられず、これはどういう意味かと問われるような場合は、どうすればいいのだろうか。この場合、自分でルールを探し、何らかのルールを（勝手に）想定し、データを解読してみて、はじめてデータの意味を理解する（あるいは理解したつもりになる）。

だから、解読して背後のルールを見つけたと思っても、実は、ルールの想定の仕方によっては異なる話になってしまうことがある。例えば、先ほどの「1 3 4 6 8 10 12」という記号列だが、仮に「4 6 8 10 12」という五つの数字の列だけ与えられて、「4」の前にくる二つの数字は何かと問われたとしよう。この場合、「4 6 8 10 12」を偶数が順番に大きくなっていく並び方だとルールを想定すれば、「4」の下は「0 2」と続くだろうし、テレビのチャンネル番号と考えれば「1 3」となる。

どちらが正しいのだろうか。これは、あるルールを作り、それによってデータを構成した本人に聞けば、その人が「正解」を言ってくれるだろう。しかし、それが無い限り、これは偶数によるものであるのか、テレビのチャンネル番号であるのか、誰も「正解」を特定することはできない。このように、解読において、どういうルールを想定するかによって、情報の意味は全く違ったものとなる。

ところで、ここで、他の答えを見いだす人もいるかもしれない。例えば、質問1のところ、答えは「K」だという人がいるかもしれない。

なぜならば、これは、自分の野球チームのメンバーの頭文字を打順に沿って並べたものだ、というのである。小川、鶴田、富田、古川、深谷、と続いてから、次に川崎となるのだそう。これもあり得ることだ。とすると、この答えは「正解」ではないが、「間違い」ではないだろう。ただ、「作者」が想定したルールから見れば「正解」ではないということに過ぎなくなってしまう。

確かに世の中では、こういった間違った解読をしたとしても、しばらくの間「ツジツマ」があって、その間違いに気がつかない、ということがあり得る。

さらに、別の人、は「S」という答えをするものの、実は、これは、ある統計データに載った市を上から順番に並べたものと認識しているかもしれない。「大阪市、富山市、高松市、福岡市、藤沢市」と続いて、次は札幌なので、「S」となったわ

けだ。答えは偶然にも「正解」と同じであるが、その次の7番目で異なってしまうかもしれない。

これらは「誤読」の可能性を示唆してくれる。あるルールに則って作られたものの一部が、たまたま表向きに一緒になっているがゆえに、他のルールを想定してしまうのである。これが、危ない。

統計データの読み間違いは、こうしたことから起こる。誤読をすると、その先の予測で間違ふ。なぜならば、誤読した場合に想定したルールと、本来作られたルールは異なるから、その先のデータは違ってくるかもしれないからだ。

科学的と称してトンデモナイ話を展開してしまう、いわゆる「トンデモ本」は、この罠に陥ってデータを誤読してしまっているケースが多いということだ。要するに、解読をしっかりとる前に、ある思惑で解釈をしてしまうのである。そうすると、全てが、あるルールに沿って作られているように読めてしまうのである。学者の研究でも、この種の間違い(勘違い!?)が少なからずありそうである。

ビジネスレポートにおいても、学生の研究レポートにしても、データを読むときに、これには細心の注意が必要なお分かりになるだろう。

余談だが、私のもともとの専門はソフトシステムズ方法論 (Soft Systems Methodology : S S M) である。略してS S Mとだけ紹介されるケースもたまにある。かつて、ある講演会の紹介パンフレットに私の専攻がS S Mだと書いてあった。それを見た参加者の中に私が流通の専門家だと勘違いした人がいた。私のS S Mの場合は、ソフトシステムズ方法論の略であるのだが、彼はスーパーマーケット、つまりメガストアの研究だと勘違いしたのである。また、ある学会でも、私のことを社会学者と思った人がいた。S S Mというと計量社会学のソーシャルストラティフィケーション (社会階層)・ソーシャルモビリティ (社会移動) 調査を指すことが多いからである。こういった省略形の場合は、解釈の前に正確な解読が必要となる。

ちなみに、私のゼミの略称はSLCという。Seminar for Learning and Colaborationの略であるが、学生はSenoh's Learning Communityと呼んでいる。

規則(rule)と規則性(regularity)

もう一つ、よくあるデータの読み違いの例を示そう。我々がよく陥る思考の罠

に、因果関係の軸の取り違えがある。これは、規則（rule）と規則性（regularity）の取り違えである。

「風邪の患者が多くなれば風邪薬の販売量も多くなる」という命題を単純に図式化すると、右肩あがりの曲線になるだろう。これを、風邪薬の販売量が多くなると風邪の患者が増える、と読むと大間違いとなる。

一方、「風邪の患者が多くなれば風邪薬の販売量も多くなる」というのは、ある種の法則ということもできるかもしれない。それは、「風邪の患者の数」と「風邪薬の売れる数」の間にはある種の相関関係、規則性があるからだ。しかし、規則性はあっても、それは規則に基づくものではない。規則と規則性は違う点に注意してほしい。

英語では、規則がルール（rule）というのに対し、規則性はレギュラリティ（regularity）という。規則性というのは、発見したり実験で裏付けたりできるが、その裏にどのような規則があるかは分からない。つまり規則そのものを表しているものではない。規則の結果生じるものだからである。だから、「風邪の患者が増えると風邪薬の販売量も増える」という因果関係には規則性はない」と言ったら、これもまた大間違いである。

いずれにせよ、情報の背後にあるルールを読むということは、そう簡単なことではない。

解読と解釈

ここで、解釈について、考えてみよう。

「古池や かわずとびこむ 水の音 芭蕉」

あまりにも有名なこの芭蕉の句は、人によってどのようにとらえられているだろうか。これは私が師匠に昔教わった解釈の練習問題であるが、それを拡張して私も授業や社会人向けの講座でよくやることがある。

受講生に目をつぶってもらう。私はこの芭蕉の句を何回か読み上げ、その上で、次の4点を質問する。

「この句の季節はいつか？」

「時間はいつか？」

「かえるは何匹か？」

「水の音はどのようなものか？」

例えば、ある社会人向けのセミナーでの答えの記録は次のとおりであった。

この句の季節はいつか？ 春 3人 夏 9人 秋 3人 冬 2人

時間はいつか？ 朝 2人 昼 6人 夜 8人 深夜 1人

かえるは何匹か？ 1匹14人 2匹 2人 3匹 0人 4匹 0人 その他 1人

音は？ ポチャーン 4人 チャポン10人 ドボン 1人 その他 2人

一つの句についても、思い描く情景は人それぞれ、こんなにも違う。これが、解釈ということだ。つまり、「古池や かわずとびこむ 水の音」をどう読むか、その結果どういう情景を描くかは各人各様である、ということだ。

以上のように、解釈と解読は違う。解読とは、データを読むにあたって、そのデータが作られた際に用いられたコードを探して、そのコードに従ってデータを読むことである。解釈とは、あるデータを読むにあたり、自らの解釈基準自体を作り出し、それに沿ってデータを意味づけしていくことである。

ところで、解読の違いが解釈の違いを導くことがある。古文書の解釈では頻繁にあると聞く。また、万葉集などの古典を従来とは別の「解読」をすることによって、従来とは違う「解釈」をしたケースもあるようだ。

古文書でなくても、例えば、宮本武蔵の『五輪書』の中の有名な言葉「我ことにおいて後悔せず」は二つの読み方が可能であるという。一つは、「わがこと」と読む。その場合は、「自分のことで後悔したことはないぞ」という意味に受け取れる。一方、「われ、ことにおいて」と読むことも可能である。「私は物事について後悔したことはないよ」という意味としてとらえられる。もし武蔵に会って聞くことができれば「正解」が分かるだろう。しかし、それがかなわぬ今となっては、どちらがより適切であるか、という「解釈から解読へ」という逆のアプローチとなってしまうかねない。

ただし、「解読から解釈へ」というアプローチも近年可能性を広げつつあるようだ。例えば、宮本武蔵の他の文献を調べて、彼の言葉遣いの癖の規則性を見つけ出して、どちらの解読が、より武蔵の意図に近いかを議論するということだ。多

義性を縮小することにより、解読範囲をより絞っていくのである。これはコンピュータと統計手法の発達した現在、古典の解読にかなり用いられるようになっていくという。

とはいえ、もちろんのこと、どう武蔵の言を解釈するかは我々に委ねられていることは言うまでもない。例えば、武蔵の文言を、吉川英治はどう解釈して小説を書いたか、その小説を読んだ内田吐夢はどのように受け取って「宮本武蔵」五部作を映画化したか。また、井上雄彦のコミック「バガボンド」はこの文言をどう意味づけるだろうか。さらに、それらを踏まえた大河ドラマに、この文言はどのような影響を与えるのだろうか。

いずれにせよ、往々にして我々は、自分の解釈を解読のように思い込んでしまう。あたかも客観的に正しく解読したかのように思っている、それはその人独自の解釈であり、他の人は全く違った解釈をしていたりすることがある。両者の違いを常に意識することは、非常に重要なことである。

そこで、次の節では、解釈に焦点を合わせて話を進めることにしよう。

3 意味づける：情報の解釈

データと情報

さて、解読ではなく、解釈について本格的に考えてみよう。情報を読むとは、解釈行為である。とすると、それは実は「意味づけ」の話となる。ここで重要なのはデータと情報の違い、それに受け身で意味を読むということと能動的に意味づけるということの違いである。

まず、情報とデータの違いを考えよう。日常生活の中で我々は、何気なく「情報を読む」とか「データを読む」といった言い方をしている。しかし、厳密にいうと、情報とデータは異なる。ここでは「情報とはデータに意味を付与したものである」と定義しよう。つまり、「データ+意味=情報」ということだ。

例えば、1ドル=130円というのは単なるデータだが、このデータがどのような意味を与えるかは読む人によって全く違う。輸出部門の部長が読む場合と、海外からの調達部門の部長が読む場合とでは、このデータの意味は正反対になる可能

性がある。

ましてや 1ドル=130円が 1ドル=120円に変化したとすると、その変化の意味は受け取る人によって大きく違ってくるだろう。例えば、輸出部長は輸出に打撃が出るからピンチと受け取るかもしれないし、輸入部門では、相対的に安く原材料が入手できるチャンスと喜ぶかもしれない。経理部門のスタッフは、また予算の組み替えをしなければならないとうんざりするだろう。また、休みに海外旅行をしようと考えている家族と、海外に勤務するビジネスパーソンにとっても、このデータ（為替の変化）は異なる意味を持つに違いない。

このように、同じデータでも見る立場によって、意味づけが全く異なってくるのである。それが、データを読むということである。

情報とは、データに何らかの意味づけがなされたものである。逆を言えば、数字、言葉等々は全てデータでしかない。意味を付与するのは、データを読む人である。データを読む人は、その人の世界観に基づいてデータに意味を付与するのである。ここでいう世界観とは、我々がモノを見るときにあらかじめ受け取る枠組みのようなものである。マインドセット、スキーマ、イメージ等々、様々な呼び方があるが、要はデータを解釈するコード体系のようなものである。

ここで、データという言葉を広い意味に使ってみよう。我々の周りにはデータだらけである。

以前、東京の営団地下鉄のポスターで、週刊誌や新聞を車内に置きっぱなしにしないようにということで、「読めば情報。置けばゴミ。」というキャッチコピーがあった（図1-1参照）。

これなども、情報とデータの関係をうまく言い表した例と言えよう。確かに、読んだ段階では情報だが、読まれていない状態であればゴミに等しいということだ。また、競馬新聞は、競馬好きには貴重な情報源かもしれないが、関心のない者に

図1-1：営団地下鉄 マナーポスター



営団地下鉄 協力：(財)地下鉄互助会

とっては単なる数字と言葉の羅列である。我々にとっては単なる騒音でしかない地下鉄の走る音も、運転手やスタッフにとっては貴重な安全データになり得るだろう。ビルの壁のシミさえ、見る人にとってはメンテナンスの必要性を示すデータになる。

さらに、行為もデータの一種と言える。だから、行為を読むということもある。行為とは人間の具体的な動きのことをいう。英語でいうアクションだ。

プロ野球の監督にとっては、選手のちょっとした仕草が替え時かどうかの判断材料になり得るだろう。漁師にとっては、わずかな風の変化が、農家にとっては雨の降り方一つが、それぞれ貴重なデータであろう。国会議員の素振りですら外務省の役人が飛び回るのも同様であろう。バッターの動きでボールを外し、スクイズを防いだ「江夏の21球」などはその代表例かもしれない。

ここで重要なことは、人の行為も、データと同様で、いろいろに読むことが可能である、という点だ。

例えば、今、この本を読んでいる読者の皆さんは何をしているか、様々な答えがあり得るだろう。

本を読んでいる

知を読む方法を勉強している

日本語の文章を目で追っている

座っている

鉛筆を持ってアンダーラインを引いている

眠いのを我慢している

文章にワクワクして興奮している

レポートを書くために読み直している

生きている

呼吸をしている

部屋にいる

変な質問に戸惑っている

⋮

どの答えも、少なくとも「間違い」ではない。つまり、ある「行為 = action」は、観点が違えば、様々な「活動 = activity」としてとらえることができるのである。